

---

# ドンちゃん

松本 和

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドンちゃん

### 【Nコード】

N2602B

### 【作者名】

松本 和

### 【あらすじ】

生物室には蛙がいた。私がドンちゃんと名付けて、可愛がった。別にただの蛙なんだけどね。

高校の生物室には蛙がいた。大きい蛙で水の中でしか生活をしない蛙だった。

どんな種類の蛙なのかは知らない。…別に興味もなかった。

初めてその蛙を見たときにその大きな体と丸いお腹からか、『ドンちゃん』という名前が浮かんできた。

だから私はその蛙をドンちゃんと呼ぶようになった。

生物室には掃除の時にしか行かなかった。掃除で生物室に行く時はいつもドンちゃんのことを考えていた。ドンちゃんは生物室に入つてすぐのところにある水槽の中で暮らしていた。

ドンちゃんはめったに動かなかった。いつも決まって両手を顔の横に漂わせたまま動かなかった。…そのお決まりのポーズが好きだった。時々手を舐める仕草をした。素早く手を動かして、大きな口で手を舐めた。

一度、ドンちゃんに餌をあげたことがある。ドンちゃんの餌はレバーだ。私はレバーが嫌いだから餌をあげるのがちよつと嫌だった。椅子に乗って水槽の上からピンセットを使ってレバーをあげる。

私はドンちゃんが近づいてきて食べるんだと思っていたけど、ドンちゃんは餌を食べに近づいては来なかった。

私はレバーを挟んだピンセットをドンちゃんの口の近くまで持っていた。

ドンちゃんは両手をワサワサと動かして、目にも止まらぬ速さでレバーを食べた。  
両手をあまりにも素早く動かすので溺れて、必死にもがいているように見えた。

…ドンちゃんに餌をあげたのは、その時の一回きりだった。もっとあげられればよかったのに…。

ドンちゃんと会ってから半年がたった。久しぶりに生物室の掃除当番が回ってきた。  
入ってすぐに水槽を覗きこんだけど、ドンちゃんはいなかった。

「どうしていないんですか？」

…と生物の先生に聞いたら

「死んじゃったんだよ。」  
と言われた。

悲しくなんてなかったよ。 …ただの蛙だもん。私が名前を付けただけ。餌をあげただけ。

…ドンちゃんと呼んで、可愛がって…。それだけ。

それだけ。なのに、どうして時間がたつにつれて寂しくなるんだろう。

どうして生物室に行くたびにもうドンちゃんがいるはずのない水槽を覗いてしまうんだろう。

ドンちゃん。寂しいよ。

いつの間にそんなに私に好かれたの？……生物室に行くたび、寂しいよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2602b/>

---

ドンちゃん

2010年10月12日04時38分発行